

血型を判定し適合せる血液のみを使用せる結果、種々の装置の改善及び実験手段の向上と相俟つて長期生存例を得るに到つた。

### 50. 右下腿即発生せる悪性腫瘍の1例

鎌田忠夫(大谷病院)

48才の婦人、外傷の既往歴なく、右下腿部 $1/2$ の外側に腫脹を来し、腫瘍剔出手術を受けたが7カ月目に再発、超手拳大の腫瘍を形成し、肉腫の診断のもとに右大腿切断術施行、更に7カ月後肺転移を来し、症状発現以来1年4カで死の転帰をとつた。

組織学的には紡錘形細胞を主とし巨細胞を混ざる多形細胞肉腫であり、発生母地は筋膜であると考えられる。尚初回手術より死亡に到る迄、化学療法として、ナイトロミン1150mg、アザン560mg、ザルコマイシン6gを注射している。

### 51. 胃癌手術後5年にしてクルツケンベルグ氏腫瘍を来せる例

松尾成久(市立横須賀病院)

クルツケンベルグ氏腫瘍は、現今では消化管系主として胃、腸等を原発とする転移卵巣粘液癌を意味し、我が国卵巣充実性腫瘍中では最も多いものであるが、最近では私は胃癌のため胃切除術を施行して略満5年経過して後本腫瘍を来した比較的稀は例を経験した。

患者は46才の主婦で、昭和26年9月28日胃癌の診断で当科に於て胃切除術施行、病理組織学的には腺癌であつた。昭和31年6月下腹部に腫瘍を触れるようになり、7月16日入院、同月19日右卵巣腫瘍剔出手術を施行した。卵巣腫瘍は肉眼的には片側性で、重量1400g、大きさ $18 \times 17 \times 6$ cmであり、病理組織学的には印環細胞を含む粘液癌で、残胃は手術時病変を認め得なかつたが、胃を原発巣とするク氏腫瘍と考えるのが妥当である。現在嚴重に経過観察中である。

### 52. 夫婦の胃癌胃全剔出例

石橋新太郎(市立横須賀病院)

胃癌は消化管癌腫中その過半数を占めて居るが、私は此処に1年の間に夫婦の相継いで発生した胃癌で、共に胃全剔出術が可能であつた比較的稀有な症例を経験したので茲に報告した。患者(妻)は64才家族歴に特記事項はなく、主訴は嘔吐及び腹部の腫瘍で胃癌の診断で手術施行する所、腫瘍は幽門部に

原発し、噴門部に浸潤が及んだ為、胃全剔出手術施行し1カ月後全治退院した。経過は良好であつたがその後、再発にて1年後死亡した。而るにその際患者の夫(63才)は葬式後過勞の為食慾不振を覚え、健康診断の意味で当科に来院したが、腹部に腫瘍を認めたのでレ線検査の結果、胃癌の診断で入院手術施行した所、腫瘍は小彎高位を占め従つて胃全剔出術を施行したが幸い治癒退院せしめる事が出来た。

以上、長年生活を共にした夫婦間に相継いで発生した胃癌で共に胃全剔出術施行し、治癒せしめる事が出来た事は興味あることと思ひ、両患者の内因的或は外因的な素因についても種々検索したが、特に認むべき事項は発見出来なかつた。

### 53. 高分子化合物の腸管漿膜に対する影響

#### (第1報) 主としてポリビニールピロリドンによる腹腔内癒着防止に関する実験的研究

小波雅亮(那須アルミニウム診療所)

i) 成犬、家兎、マウスを使用して、水溶性のポリビニールピロリドン(P. V. P)により腸管及び腹膜、大網膜の癒着防止を試みた。

ii) 人為的に腹腔内癒着を生ぜしめ、剥離後、各濃度P. V. Pを注入し2, 4, 14日目に開腹し再癒着の有無、腹水等につき検索した。

iii) 結論として20% P. V. P 100ccを2回(術中及び後12時間)注入した症例に全く再癒着を生ぜず、卓効を示した。

iv) 作用機転は不明であるが腹膜及び腸管相互間にビニールの液状薄膜が介在し、之が組織と親和性を有めぬ為、かゝる作用を為すと思ふ。

v) 尚ほ至適P. V. Pは重合度370、推定分子量4万のものを使用した。

### 55. 横隔膜ヘルニアの1治験例及び横隔膜レラクサチオの1例

山下泰徳(市立横須賀病院)

症例1. 45才の男子、高さ4mの電柱より転落し、頭部、脊部、及び上肢に打撲擦過傷を受け暫く安静加療を受けたが、軽度の左胸痛持続せる他愁訴なき為約2カ月間放置し軽作業に従事していたが突然嘔気、嘔吐を伴う激しい左胸痛を訴え来院す。レ線検査に依り左横隔膜ヘルニアと診断、開腹、開胸に依る根治術を施行し、治癒せしめ得た。ヘルニア内は左横隔膜主腱部にあり鶏卵大にて、ヘルニア内後縁と脾臓とが癒着し、ヘルニア内容は胃の大部

分、脾臓、横内結腸及び大網であつた。

症例 2. 4才の男児、出生以来継続せる排便時右胸痛及び咳嗽を訴え来院、胸部レ線検査にて右胸腔内に突出せる小腸陰影を認め、人工気腹術にて高度の右横隔膜レラクサチオである事が判明した症例である。以上の2症例を報告し両者の鑑別診断に融れ文献的考察を試みた。

#### 56. 兄弟に発生せる腸重積症

大津 饒 (県立佐原病院)

生後3カ月の乳児の腸重積症を手術的に治癒せしめたが、此の際家族歴に兄弟6人中4人迄腸重積症に罹患し、3人は死亡したことをしつた、但しこの3例は何れも他医にて治療したが、症状より明らかに腸重積と思われる。

① 長男、5カ月にて罹患、手術せず約70時間にて死亡。

② 次男、健康、現存。

③ 長女、健康、現存。

④ 三男、4カ月にて罹患、約10時間後手術を行うも術後1時間にて死亡。

⑤ 次女、3カ月にて罹患、手術せず約80時間後に死亡。

⑥ 四男、本症例、3カ月にて罹患、約10時間後手術、嵌入腸管を引出し固定、治癒す。

以上より何か家族的な因子も考えられ、腸重積の発生原因と文献的に考え合せ考察した。

#### 57. 肺結核肺切除200例の統計的観察について

中島正博、大西盛光、草柳芳昭 (松籟荘)

昭和28年以来当荘にて肺結核肺切除術を施行せる200例の統計的観察を行い気管支瘻及び膿胸等の合併症を検討した。

① 切除術式別では上及び下葉にわたる切除のものが19例中5例に合併症を惹起したことは注目に値する。

② 術直前迄排菌陽性なるものは術後も菌陽性例が多い。

③ 術後菌陽性例の半数は気管支瘻例であつた。

④ 肋膜癒着強度のものは肺再膨脹不良に陥り易く瘻の発生が多い。

⑤ 気管支瘻の決定的診断法として気管支造影が優秀である。

⑥ 合併症に対する処置として早期の発見につとめ善処せねばならぬ。

#### 58. 小児虫垂炎の174例

深町 信一 (深町病院)

昭和26年11月より本年10月末日迄虫垂切除698例(男1:女0.95)中15才以下の小児虫垂炎174例(男1:女0.72)を経験した。しかし11才以上は臨牀的に成人型と殆んど変る所がないので10才以下に就て観察した。10才以下の虫垂炎49例(男1:女0.58)で最低は3才4カ月の男児で5才以下の発病は非常に少い。

本症が多発した月は2月、6月、7月、10月、12月であつた。49例を病変の程度により分類すると、カタル性23、蜂窠織炎性7、壊疽性8、限局性腹膜炎併発5、汎発性腹膜炎併発8、蛔虫迷入性5、であつた。そして年小児程重症例が多く、5才以下の4例は全例汎発性腹膜炎を起して居り最低年令児(3才1カ月)は術後2日目に死亡した。病変の程度と体温に就ては、他に合併症を伴わない非穿孔例にあつては、38度以下が殆んどある。病変の程度と白血球数には一定の関係は見られず、此れに依つて病変の程度を察知する事は難しい。従つて診断の最も根拠となる事は臨牀症状であるが、殊に腹筋緊張を正確に把握する事は重要である。手術手技に関しては何等成人型と変る所はないが、重症型の術前術後の処置、殊に輸液は重要である。又麻酔は腰麻0、局麻15例、バルビツール酸剤筋注麻酔34例である。病変の程度と平均入院日数は、カタル性8.1日、蜂窠織炎8.8日、壊疽性8.4日、限局性腹膜炎併発例16.5日、汎発性腹膜炎併発例25.5日、蛔虫迷入性8.6日であつた。

#### 59. 術後紅皮症例追加

宮川 勝馬 (宮川病院)

霜田氏により術後紅皮症として報告された症例と同様な症候を呈して死亡した4例について、先般雑誌外科に発表した。最近更に2例を経験し、特に1例は治療せしめ得たので追加報告する。

症例 1. 52才、♂ 胃癌による胃切除術後7日目に発症、発症後3日目に白血球数4700、直にペナカールB<sub>6</sub>静注、アイロタイシン内服(1日量4時間々隔1200mg)、輸血(1回100ccにて中止)を開始。発病後11日白血球1600となり死亡。

症例 2. 35才、♂ 盲腸周囲炎手術後8日目に発病、翌日顔面、頸部に発疹、発病3日目に白血球数3800、塗抹血液像に顆粒白血球全く消失、同日より輸血(第1回400cc、第2回200cc、第3回100cc)